

北 辰 會 雜 誌

第 二 百 三 十 三 號

北 辰 會 雜 誌

第 二 百 三 十 三 號

第 四 高 等 學 校 文 藝 部

# 目次

## 短歌

別居その他

水上一久

短歌二首

美原博

初詣で

本田友重

季節の感情

安居次夫

近詠抄

山本捨三

舊師を訪ふ其の他

佐藤正一

夜

西村忠恕

## 俳句

寒椿

西村忠恕

山影

森内昌之

## 詩

春宵その他

安居次夫

静寂

辻本精一

五感―或る男の、其他

美原博

冬

水上一久

憂鬱な神経

本田友重

小菊其の他

西村忠恕

ぶらんこ他五篇

木村正二

逍遙

山本捨三

三等客車

福井健一郎

## 創作

海の囁言

山本三朗

鍵(一幕)

福井健一郎

## 論説

神秘なるものゝ姿を求めて

佐野東徳

雑記・編輯後記

別 居

水 上 一 久

窓の外の冬木の梢目に寒し新らしくてこの二階に住みて

移り來てうら寒きまゝ貰ひたるすゝめ焼きつつひとり食べむ

この家は鼠騒ぐなり夜更くるに炭をつぎゐる心寒さや

夜ふけて寒さ加はるふとを見し鏡の顔は愛しきものを



移り來て心さぶしき部屋なれやタバコのみ  
むこと多し

曇りつゝ暮れなづむ空のはてにして澄みの深  
きは陽の在り處ならむ

聞きすませば静けきものか夜をとほす心にし  
みて響く川の音

春と思ふ空の蒼さよつぶらなる檻の果はみな  
光をもてり

あはたゞしき心をもてり夕街は照りかげりつ  
つ雲ひた動く

庭の隈にけのこる雪のよごれしまゝ雪降らず  
なりて幾日か経りし

木立透る光ともしみ枝移りつゝ雀子は鳴き止  
ます

冬の日のあはき陽ざしはしたしもよ冬蠅のご  
ともぬくもりてをり

二十歳と心に云ひて顧みれば索然として寂し  
きものを

美 原 博

霜置きて家居いえしずもる一つびとつなべて初日  
のかゞやき居るも

### 初詣で

本田友重

篝たく落ち火に年は明けぬめりみかぐら高き  
白山の宮

そゝり立つ杉蔭に入りし月明かく千木をくま  
どり宮居しづめり

篝たく烟のなびくきざはしに手取の流ながれひゞ  
き聞こゆる

曉の空に初日の色みえて宮居の杉に風も落ち  
つゝ

### 季節の感情

安居次夫

街の灯

かくまでも悲しきものか街の灯ひは酔ひ痴れて  
「啄木」をわがうたふとき

桐の花

かた戀のわれをあはれむ夕ゆふさをさびしらに  
降る桐の花かな

夜の鋪道

夜を深み鋪道をつどひ歸りゆく女給らの姿さ  
むざむと見ゆ(映畫「想ひ出多き女」より)

遊女(廓の裏路を通りし時詠める)

影のごと寄り添ひ來る遊女(たはれめ)の夜目に哀しき唇  
べにの色彩

袖引くを拂ひて去れば背後(うしろ)より罵ることのい  
かに寂しき

あらひ髪

洗髪のほつれ毛ゆゑに吾(わ)に寄れる君が襟元(うなじ)の  
戀しきものを(Hといふ人に)

近詠抄

山本捨三

第九師團出征

出征兵來るといまやなだれたり曉たかく歡呼  
とよみぬ

酒に酔ふ兵ののしりきくにさへ寒き國土(くにつち)に  
いづる皇軍(みいくさき)

支那にいづるつはものどもよ勝ちこよとうち  
振る旗し皇國旗(みくにばた)かも

出征兵士おくりきたりし朝の街遠き山脉を白  
しとはみつ

車中望見

窓せまる谷をうづむる白雪の消ちのたぎちか  
裾川のみづ

雪つめる裾の木原にみたりけりすでになぎぬ  
る谷川の水

雪ふかき隧道にいる汽車の笛たかくひびけば  
心痛みし

雪ぶかき山里の驛にとまったり動きいづる音  
のろけさ

わが走るごしき山ゆみおろせる遠き海邊は  
光さしをり

冬の日

ぬく日てる冬椿より目をやりぬそのたまゆら  
に鳴けるかなりや

ベル鳴りて急ぎ走りくるそのときの玄關の築  
山に雪のましろし

築山にふる雪賞でてはしり來りふとあひし師  
にただうやうやし

山がはのひびきの岸にたちるつつひとのいの  
ちの尊さおもはむ

出郷

あかときの町いづるなり老ふかき父のうしろ  
をみまもりてゆく

あかときの田の面の草屋に煙あがりそのかた  
はらに鶏なくも

あかときうまやの驛だまりにむかふ一本道冬田のあぜの水み  
溜だまりこえぬ

驛にはすでに仲仕ら働きをり貨車より倉庫へ  
荷をはこびつつ

朝はやく貨車より荷物をはこびる人の大聲  
をききすぎにけり

汽車の入戸とにたてばぞみゆる河口に白き蒸汽  
の一つうかべり

# 墓詣

風むかふ冬田の畔をひとりゆく墓詣まうてのこ  
ろはりつつ

日もすがら松風さはぐ墓原にたちねの碑は  
朽ちてたちけり

湖風うみのふきとほりくる墓原みづはらに生けるひとのこ  
と母にかたりぬ

はろけくもすぎにしものか拜みおへて田の方  
みれば自轉車はしれり

送 別 會

一月十六日夜犀川河畔こりやにて級の送別コンパ

もろともに別をおしむ今宵なり橋にただずみ  
て水をみつむる

ただずめば水の音さゆる橋の上におばしまに  
ちる雪をみてをり

窓外の川に雪のふり出しこの夕たゞたのしら  
に盃をあぐ

一月二十九日文藝部コンパ

いまにして思へばうれしはかなさも君がうた  
聲のすぐれたるにて

友だちらたち舞ひあそぶそのなかに我うたひ  
たりたゞ歌ひたり

舊師を訪ふ 其の他

佐 藤 正 一

(一) 歸省車中

黄昏の濱邊の田居にわらによの並びて立てり  
海鳴りもなし

雪の量の一瞬ごとに増えゆきて吾故郷に近づ  
きゆくも

(二) 途中下車長野に舊師を訪ふ

宵闇にたどりつきたる師の家の煤けし板戸に  
手觸れにけり

庭に咲く八手<sup>やって</sup>あはれと師の云ひしその花既に  
散りてありけり

師の庭の八手の花は散り落ちて花莖<sup>はなぐき</sup>白く暗に  
残れり

缺餅<sup>かきもち</sup>嚙り茶を呑み林檎を食ひてあり故郷に來  
し心安けし

故郷の漬菜の味のすがしけれ幾月ぶりに吾は  
食みしか

師の家に一夜を寝ねて此の朝<sup>あした</sup>温かき湯に顔を  
洗ひぬ

師の家に御堂の鐘は聞こえ來ぬ朝靜かに茶を  
のみてあり

(三) 師の家を辭し家に向ふ  
故郷<sup>こきょう</sup>近み電車の中に一人々々顔見廻せど知れ  
る人もなし

汽車の窓ゆのぞむ山々雪負ひて霧らへるあた  
り父るまさむか

(六・十二)

出征兵士 二首

出征の兵士は酔ひて泣かざりき故郷<sup>こきょう</sup>に貧しき  
妻子らはるる

悲しさに飲みたる酒に酔ひしれて酔ひしれて  
こそ歩きあたはめ

逍遙 三首

河原はやかがりつゝ遠山の峯の紅葉に薄陽  
さす見ゆ

秋の陽の名残を浴びて河土手に釣する人と言  
をかはしぬ

小石拾ひ河に投げ込む童の顔にも手にも夕陽  
の光みつ

夜

西村 忠 恕

冬となる夜風の音の冴えざえに。身をこらへ  
つゝ生きなむと思ふ

雨戸を打つ風音のすさまじさ。君健やかに暮  
らすと思へり

いそしみるて時経ちぬらし。隣り家の時計か  
そかに今打つを聞けり

起きてゐて寂しくなりぬ。ひたすらに思はむ  
とすることのとしさ

霜

ほのあけに山際明り、霜の道をひた踏み來れ  
ば、鴨羽ばたきぬ

あかときをしづまりかへる山の烟。桑の根も  
とに霜白くある



霜凍てのあかとき空にひゞき耳る汽車の轍の  
音聞けるかも

はく息も凍ると思ふ。森の道ひた踏み來れば、  
日は昇りけり

きらゝ日の木もれ強きに、森の道。まだとけ  
ずある霜はかゞやく

## 寒 椿

西村忠恕

ひらいて落ち日する椿のはな  
椿の村道や馬の鼻息しろう通る  
戻つたらまづ君を訪ねる枇杷のはな  
枇杷のはなゆるる冬陽やはらぎ  
枯草踏んで踏んで冬の水澄むなり  
山ひかつて水ひかつて川原の石ころ  
ふくらんだ芽の雲を浮かせてゐる

湯上りの頬撫でて風の山茶花

### 山影

森内昌之

山影や風の中の星一つ

野の川や星冴ゆる夜の水白し

朝々の霜おく草や藁の屋根

初雪や切株の田に家一つ

さえくと冬の日薄き田面かな

(11・15)

### 春宵

安居次夫

春宵

雨に潤んだ黄色い街

—March 1931—

### 白日夢

—Hといふ人に—

憂鬱なるまどろみの極

霧の中 心失ふ

微風

白日の夢破れて

灰白き花の一輪

音もなく地上に散り

はるかなる色褪せし空  
海の香はほのかに漂ふ  
微風

白日の思念を亂し

愁傷の空

戀人の横顔を描く

## 十字架

愛慾の亂舞 喚き戦く

氾濫

情火燃えて 歡樂の洪水

蛇身となり 毒酒を吐き

野獸となり 闇に狂ひ

肉を噛み 生血をすゝり

一切の終焉 肉體の潰滅

## 黎明

罪惡の床に 魂は歔歔し

蒼褪めた悔恨 神の袖をとらへ

アダムとイヴ

自らの裸身を知る

一瞬の生命 聖夜の火焰

愛とよび 生命と誓ふ

抱擁の陶酔 いまはむなしく

癒しえぬ創痕の痛みに

日を數き

時を呪ひ

沈黙の吐息 惱髓の亂脈  
宿命と叫び 現實と憩ふ  
贖罪の涙 すでに虚しく  
踰越として 地上を這ふ  
慈悲をもとめ

光をもとめ

呵責の筈 奈落の底

今はセータンの蛇身の苦悶

怨恨つきぬ

甘美の誘惑 苦汁の實

人の子はいま

しんじつのところに救世主を祈る

—August 1930—

## 夜 雨

こもりゐて夜を孤り まどろみもやらで われあれば

しめやかに 夜雨 わがかたへにしのびよりたり

いま 燭もうすれ しめりたる部屋に

ほそぼそとむなしき慰安の煙草も消えて

身にそへる悲哀の詩もなければ

まこと 憂愁は 深き夜の思念に迷ふ

かの夜 闇に去りゆきしひとのすがたよ

あはれ 夜雨の音……運命さびしく

はるかに われ そのかみを慕ひてみれども

すでにゆきて かへるなき日のことにしあれば

むげにそむきて去りしひとの

また歸り来る日もなからむものと

すゝり泣くごとくもひとり身を伏する

わが思慕のつくることなく

わが悲哀の消ゆるはなくて……

—October 1930—

## 少女達

としわかき少女を見るたび

かたみに笑みて語り合ふ

白き幾人かの少女を見るたび

われはこよなき幸福を感じ

その丈なす黒髪を

それぞれのよきかたちに結びて  
かくはしきものをたゞよはす  
汚れなく清らなる腫は  
はるかなるものに  
やさしき憧憬ちこがれをしめし  
めずらなるものには  
すなほなる驚愕おどろをあらはす  
あゝかゝる少女達  
その腫をかゞやかせ  
白き手もて  
ものかたちをえがきつ  
ともどもに語り合ふ姿にこそ  
まこと若き日の喜悅よろこびは宿らめ  
匂よきうすもの下には  
ふくよかなる身を横たへ  
ほのかにもり上りたる乳房には  
人知れぬ思念おもひを秘めて  
あるときは

堪へがたげにその胸をいだく  
さればかゝる白き少女達のまどろを見るは  
たとふれば  
しめやかなる黄昏の部屋に  
訪なひ来る戀人を待つがごとき心にしも似て  
この日いちにちのたふとき生命いのち  
ともに語りはむしたしきひとをこそ  
ひそかにもわれは慕ひて見るなれ……。

—1930—

## 愛のない風景

—自らを愛する詩—

ひさしぶりで  
わたしは 少しばかりの金子を手にすることが出来た  
思へばこの數日間といふものは  
ひもすがら うすら寒い部屋の中に坐つてゐて  
私は 北國特有な險惡な冬空と

氣がつかない間にすっかり葉を落してしまつた木々の梢とを

ぼんやりと曇つた硝子戸の外に眺めながら

炭火の少ない火鉢の中に

のみさしの煙草を探しては

丁度この季節のやうにうらぶれた憂愁を

どうにかニコチンでまぎらはしてきた

今日 わづかとはいへ

銀貨の幾枚かを手にすることが出来たのは

たしかに 私には嬉しいことであつた

街へ行かう！

私の心は明るくなり初めた

きつとその時私の頬にも晴やかな微笑が浮んでゐたことだつたらう

さう さう

こんなに寒くなつたのに

まだ足袋さへも持つてゐないのだ

靴下もすつかり穴があいてゐる筈だ

百貨店へ行かう！

そこで それらの買物をしよう

大好きなシネマも長い間見てゐない

それにかふえーにも長く行かない

久しぶりでそこへも出かけて行き

ストーブをかこみながら

朗かな彼女達と楽しい會話を交してみたい

いそいそと私は家を出た

丁度わたしがシネマハウスの傍にさしかかつた時

オーケストラの伴奏がかすかに聞えてきた

しづかに立止まつた私の眼には暮方の空が映つてきた

なんといふ寂しげな冬空なのだらう

それになんといふ悲しげな街の灯なのだらう

私は急にシネマハウスに入ることがいやになつた

其處で 私は きつと

私にもつとも近い生活か

でなければ

もつとも遠い生活を見るにきまつてゐる

いづれにしても寂しさはつのらされるだらう

とぼとぼとわたしはその前を通り過ぎていつた  
それから　しばらくして私は或かふえゝの前に立止まつた  
絢爛なネオンサインを見上げながら

其處で働いてゐる彼女達の生活について私はしばらく考をめぐらした  
僅かなチップ暮らしの彼女達には  
殆んど金子を携へてゐない私などは

一人の厄介な迷惑者に過ぎないだらう……

けれどあの黒い腫の少女だけはやさしいのではないだらうか……

そのやさしさが決して私一人のために用意されてゐるものではないことを  
よく知つてはゐるけれど

どうしてもさう考へたくない私だつた

その頃すでに少女に愛を感じはじめてゐた私だつたから

しかしどうして少女に愛を強ひることが出来やうか

私の臉はいつか熱くなつてゐた

はじめて自分の愚かさが分つたやうな氣持になつていつた

けれど　その愚かさを咎めなくなかつた

勿論　少女を怨む氣持などは少しもなかつた

たゞ　力のない孤獨の人間の寂しさが悲しかつた

私は百貨店<sup>デパート</sup>の方に歩を移しはじめてゐた

白いエプロンの少女の聲に迎へられてやがて私はその中に入つていつた

吹きさらされた街の風景にくらべて

そこにはなんといふ甘いはなやかさとあたたかさとが漂つてゐたことだらう

賣子達のリングのやうな頬をながめ

楽しさうに語らつてゆく買物の包をかゝへた人達をながめ

私はぶらぶらとその中を歩いて行つた

私が足袋を買ひ靴下を買つた時には

金子はもうのこり少なかつた

でも人並に買物の包みをかゝへることの出来たことは

たしかにさゝやかな私の喜でなかつたらうか

デパートを出ると冬空はいつしか雨になつてゐた

傘を持たないのでしかたなく私は雨の中を歩きはじめた

あの暗い部屋からいそいそと出た時の氣持にくらべて

あゝ　なんと變つてしまつた今の氣持なのだらうか

雨の中には街燈が泣きはらした瞳<sup>め</sup>のやうに潤んでゐた

掌の中で残り少ない幾枚かの銀貨のなんといふ冷たさだ！

愛のない風景が心象<sup>サイジョン</sup>の中に擴がつてきた

その中に私はまた見なければならなかつたのだ  
闇の中を寂しげに彷徨つてゆく  
あゝ いたいたしく寝たいいつものわたしの後姿を……。

—November 1931—

## 雨の街

——この一篇を山本捨三兄に——

暮方は狭霧のやうな雨

馥郁と料理の香が街を流れる

私の描く暖かい夕餉の食卓

蒼茫とした旅の風景の中に

今日も毎日の空腹に悲しい諦を呟きながら

西洋館の窓からはびあゝのリズム

少女達のやさしい合唱も聞える

私のさゝげる瞬時の夕の祈禱

癒しえぬ傷心の愛撫の中に

もう名前さへ忘れた少女を故郷の記憶の街に探しながら

プラタナスの葉蔭に忍ぶ夕闇

涙は寝れた頬を流れる

私の描く蒼ざめた冬の風景

暮れなづむ街の雨の空に

幾人かの友と訣別を歎いた今は遠い昨日の記憶にむせびながら

狭霧の雨に滯れる花の憂愁

心象にも一輪の花が揺れる

私のさゝげるしめつぽい接唇

悲哀の面紗の中に涙しながら

恋人よ あゝ永遠に微笑まぬひとに雙手をさしのべながら……。

—Masch 1931—

## 空腹

——心象風景——

風はいつでも僕のまはりを吹いてゐる 僕が氣がつかなくても



いつも僕は風の中を歩いてゆく 瘦せ細つた陰影をつれながら

木の葉たちばかりが風の中でのたのしいおしやべりを知つてゐる

ときをり風がやんで木の葉たちがどこかへつれてゆかれると僕は一層さびしくなる 風が吹いてゐるときよりも

僕は「僕」からにげだした僕が風の行方を追つかけてゆくのをぼんやりながめてゐる いぶかしげに首を傾けて

ふたたび風が吹きはじめると僕は思ひ出したやうに僕のかなしい空腹をかんじはじめる あゝとためいきしながら

—April 1931—

## 死

### 報告

死の報告は聲音もなくやつてくる

暮方黒い影を門口に引いて

## ★

悲哀の中には恐怖に狂つた暴風雨の海がある

—March 1931—

### 遺族

死は遺族の間に一枚の白紙をひろげた

人々は白紙の上に死者を探さうとした

死者は永遠に甦らないものと思へなかつたから

死者は近所へ散歩にでも行つてゐるやうに思へたから

## ★

記憶の林の小徑でひとびとははじめて頬の涙に気がついた

小鳥があまり悲しさうにないたので……。

—November 1931—

## 静 寂

辻 本 精 一

くづれかゝつた  
築土の石垣が  
たゞわけもなく  
まばらに濡れてる  
茶色の水は  
鉛の様に動かない——  
死んでゐるのか？  
だが——と一寸首をかしげたトタン  
思ひ出した様に  
落ちた雨滴  
オ——

泡が——

生れた——

さうだ

やつぱり生きてる世界なんだ

## 五 感

美 原 博

——或る男の——

1

【眼】

銀幕の幻影に充血した瞳みを潤す

現實が乾燥びた砂埃で水晶體を傷つけたから

2

【耳】

五弦琴のむせび音に聴覺の小波をふるはせる

現實の喧騒の埒塙にはあまりにデリカな鼓膜だつたから

3

【舌】

マシマロウの舌ざわりに處女のほろ甘い接吻を忍ぶ  
現實は蓖麻子油のやうに虫づを走らせたから

4

【鼻】

緑の匂ひ籠めた温室の朱槿の蔭に休息を求める  
現實は鼻粘膜を人肉の燻しで癩痺らせたから

5

【皮膚】

暖かい寢室と滑かな肌と佛蘭ネルの寢巻を憶れる  
現實はバラビンのやうな薄皮に極寒の如く無情だつたから

だが

彼の脳味噌は現實と逃避の因果律には  
豚よりも無智だつたのだ

1932, January, 24. —

## ニヒリストの夢

眞赤に燃える暖爐にのせた氷柱のように僕は足もとから溶解して行つた・青白  
い氣體になつた僕は冬空を地球軌道の外へとのがれた・冴えたオリオンのは  
氣體の微粒子を、冷たい星に凝集した。

瞬間僕は遠い彼方に廻轉する地球の壁に、しがみついてる人間等を見た。

—1932 January, 10.—

冬

水上 久

檜、椎、櫟、山毛櫸

蒼茫たる山麓の森林は煙りて

空過ぎて雲いくつかゆけり

山脈はすでに雪を冠りて

小鳥ら鳴き去る

かなしき山麓の森林は

煙りて雪を待てり

蘇苔 羊齒 朽葉 新らしき斧跡の

甘酸つばい樹液の匂 白き鳥の糞の匂

中庭の薪置場を過りて

かなしき山麓の森林を感ず

山脈はすでに雪を冠れり

—1931. 11.—

### 憂鬱な神経

本 田 友 重

—みかんの皮が部屋中一ぱいだ  
風邪心地の頭が重苦しい—

まわりの奴等は

何かしやべつてゐる

俺はわからぬ

コーヒー茶碗の中に

冬蠅がうごめく

前脚が一步

後脚が一步

俺は六本の脚の動きをみつめる

その動きに

俺の神経が吸収されて行く

……何だい……

ぬつと出た太い手

蠅はバツと飛躍し去つた

しやくだ……

奴等はまだ何かしやべつてゐる、

俺の視覚のやり場がない

—一九三三・一・二六・夜—

小 菊

西 村 忠 恕

おはやう

足もとの聲は

小 菊

おまへだね

霜かむつて

きいろい呼吸<sup>イキ</sup>して

でも

生きてゐるね

あゝ

おてんとさまだよ

おまへも

すぐ あたたまるよ  
ね

—26th Jan, 1932—

み な と ま ち

暮れなすむ

まちの灯<sup>ヒ</sup>。

山かげの漁港は

いま 夕餉<sup>アサ</sup>のけむり

波が

そつと囁いたら

燈台は

赤い灯が……

をんなたちが

海べへ出たら

ボンボン船が

旗たてて

魚積んで……

燈台のまたたき。

—27th. Jan. 1932—

育<sup>ハグク</sup>  
み

可愛いこ

ひとりぼつちね

おまへは

母さんは

かへつてこないのね

うん

母さんは

いつちやつた

だが

ぼくは泣かない

をとこだもの

可愛いこ

おまへは

求めてるね

ころを

うん

ぼくは

育つてゆくんだもの

ころを舐つてね

可愛いこ

おまへは

すなほだね

ねえちゃんか

ころをあげようね

うん

育ててね

ぼくが

大きくなつたら

ねえちゃん

うれしいだろ

可愛いこ

だまつて

すすくと

育つてね

ねえちゃん

うれしいの

—27. Jan. 1932—

## 夜

なにか来る星夜のわたしのかげだ

くらい吐息して音は霜夜の

おもかげよ見えて壁のおもかげ

## ぶらんこ

木村正二

渚のぶらんこはぼんとはねてかもめともはやく蒼い波をすべる

しまをなしてゆれる海底<sup>うみぞ</sup>の魚のむれ

あふねが みえらあ

白い雲をやぶいてぶらんこがおりてくるまるい顔の少年をのせて

とびうをのやうにところは蒼天たかく

少年は微笑を追ふいちまいのはんかちになる

一九三〇・八・三〇

## 風景

低い唄がきこえて欄干に佇むと遠く港を離れた汽船は黒い煙をひきいまや白い腹をみせた魚のやうに海へもぐつていかうとしてゐた。波止場にまで立罩めた霧のなかに唄がきえてしまふと街蔭から化粧した郵便馬車が泥酔した水夫達の唄聲を乗せてたんだ翼を濡らせながら霧の底にもぐつていつた。

## 夕方

瓣の匂ひに酔はされたせうだらうか。僕はすっかり幼童の姿となつて灯のはいつた並木道にあるいてゐるのだつた。黄色い窓のついた旗をもつて。旗のなかの窓は故里の風景をみせて覗き繪のやうに開いたり閉ぢたりしてゐた。

## 古い頁

むかしみたすくりいんの女たちはとしをふるにつれて僕をぬきすてていつた。僕のでのひらにはそれでかすかに髪のがにほつてゐる……。

すくりいんにはいろのない雨ばかりふりつづいた。ときどきびやのがぼつりとなつたりした。

——ある日とうとう僕はすくりいんをとちてしまつたてのひらで。  
古い頁のやうに。

## 病後

楡の幹に凭ると脊中に冷たさがしみた

——全く久し振りだなあ  
レコードでおぼえたはやり唄を口笛で吹きながらもつてきた手帖に僕はまはりの樹立を寫生しはじめた

病院の白い煙突に雲がながれてゐる



——彼に——

散歩のついであたらしい日記を買ってきた

——二十歳の　けふは僕の誕生日です

雲をのせた夕暮が街をつつんでしまふと窓のなかで僕はイニシャルのうかんだ菓子をかじかんだ手でくづしていく

逍　遙

山　本　捨　三

誰かうしろから石を

投げるものがある

私が森の中へ入つてゆくと

枯れ透いた朝の木々の幹に命中して

高らかにひびく礫ついでの反響

かーん　かーん

かーん

どこからとなく絶えずこだまする石音は私のゆくてでおこつたり

私のうしろでと絶えたりする。

海のやう青い朝の空のある林中で

私はたちどまつてきいてゐた

——はていつたい誰が遊んでゐるのかしら？

うしろをみても前をみても

誰ひとりみえない枯れ透いた林に

木に命中する礫の快音が

ただつきからつき聞えるばかり。

私は歩きはぢめた

そしてふと思ひ浮べた

——あゝ、

あの少年だつたのか——

私は心にほほえましいときめきをおぼえ

森の奥ふかく一散に駆けこんだ。

三　等　客　車

むせる 吐氣  
のろい 廻轉

誰もが重く息を吐いて

誰もが苦しくおし黙つて

五体に……官覺に……

車の……きしめきの……

這ひ……傳ふ……

レールは——

レールは——

レールは——

熱いステイムと……

かきまわされた満腹と……

ほてつた口と……

たゞ冷たい頬と……

あゝたまらない

窓を開けてぐつと外の空氣をのみ込みはしたが……

五体に……官覺に……

レールは——

レールは——

レールは——

(一一・二七)

### 夜の坂を下る

——小さい英雄の歌——

金星は笑つてゐた

街は涙にぬれてゐた

(街の人よ。泣いちゃいけない)

闇に燃える悲哀の色

灯々の悶え

(誰か赤鬼の圍爐を消す者はないか)

誰か？

勇者よ——僕は

金星を帽子に冠り

ドブに落ち込んだ青白い月をいくつも拾ひながら

夜の坂を下りて行つた

ひとり街の方へ……

(1・117)

## 海の嚙言

山本 三朗

—

——折々は自ら欺く快さを

お味ひになるのも妨げなしです

だが長くは我慢ができませんまいよ

此がもつと續くと、陽氣にお氣が狂ふか

陰氣に臆病になつてお果てになる。——ファウスト——

滴るやうな星明りに、ほの白く浮出した汀には、漣が夜の寢息の様なモノトナスな、併し懷しみのあるリズムを成して縫れ合つてゐる。黝黒色に溶けこんだ沖合には烏賊船の、漁火が夢みる様にトロンと瞬いてゐる。

尾木は今日も人氣のない砂丘に蹣跚<sup>ウツマ</sup>つて、メフィストの執拗な囁きに胸苦しい侘しさを感じてゐる。自ら欺く快さ、にはも早や浸り得ない尾木である。理性と官能の飽くことなき鬭争に萎

え疲れた彼の神経は、鋭い都會の刺激には到底堪えらる可くもなく、河村の誘ふままに、A市から程近い此の漁村に來たのであつた。

灼け爛れる様なごみごみした街々トタン屋根に射返る強烈な眞夏の太陽の息づまる様なめまぐるしい、都會の動きは、彼をして、クラシツクな、田園の平靜と、寂愁を懂れしむるには充分であつた。彼にとつて都會の生活は汗ばんだ呻吟の世界であつた。彼は矢も楯もたまたらぬ、ノスタルジア似た氣持に驅り立てられて、此漁村へ來たのであつた。

然し、無爲と倦怠の成すことなき、其日其日の生活にはデリケートな彼の心は都會で空想したあの靜寂と、調和を感ずることができなかつた。やがて、又やりどころのない、不安がきざしてくると、美濃紙に落した墨滴の様に支へることの出来ない收効果的な壓力で心の中に押し廣まつてゆくのだつた。そして荒海に乗り捨てられた捨小舟の様に彼の孤獨な魂は得たいの知れぬ心の暴風にいたいたしいばかり、翻弄されるのだつた。併し、腹立しいまでに弱い性格の持主であつた彼には到底、その暴風を押し切る丈の氣力はなかつた、不安をつきつめることも出來ずデカタンに麻痺し切ることならず、徒らに、殺到してくる壓潰する様な威力に我にもあらず慄くばかりであつた。

泳ぎ疲れた、肉体からくる凋殘な氣持に浸り乍ら尾木は遠く海岸傳ひにちらちらするK町の灯をみつめて居る。小さい漁師町ではあつたが、黝靄絨の様な滑な星空を背景に、町らしい華かさを漂はせて、影繪シルウヰトの様に浮出してみえる。漁師舟の出きつた、砂濱が妙にガランとして時折物怖えた風に躍り止る、飛魚トビウオの微かな水音が森閑とした夜の靜寂の中にこだまする。

「『烟』の中のリトヒノフの様に、俺は俺自身をさへも信じられないで、烟の様な生涯を終るのではあるまいか。」——尾木は、いつにないしつとりした氣持でフト考へた。

「ヤア、尾木、此處だつたのか、」河村の胴皮聲が思ひがけなく脊後で、まどろみかけた尾木の夢を破る。惜しい様なホツとした様な錯雜した氣持で振返る尾木の傍へどつかと踞りこむ。

「何處へ行つてゐたい。夕飯にも居ないやうだつたナ。」

「ウム、Kまで。」

「兄貴を受け出しにかい。」

尾木は今日の晝ちらりと耳にした河村の父母の話を思出して何とはなしに言つた。

「ウン、さうだ。」

此漁村に限つた譯ではないが——の若者達は餘程の變者でない限り大てい、さうした遊に興味を持つてゐた。河村の家は、村でも大きい方の網元で、それに少なくない田地も所有してゐたので、金廻りもさう悪くはなく、——勿論息子を、高校に出してゐる程だから、——兄のかうした醜体はさして珍らしいことではなかつた。

かうした——河村に言はせると、むき出しな人間性なのだが——淫靡な雰圍氣が淨らかな、尾木のイリュージョンを無殘に破壊し去つた直接の原因ともなつてゐた。

「だが兄貴は本當に憎めないよ。却つて俺には、懷しみが多いんだ、俺だつていや誰だつて、あの兄貴と少しも異つてやしないよ。いやに、道義家振つた奴等から見ると實際、兄貴の様な人間は、尊敬さへしたくなる。」

尾木は、言葉の重さを量る様にちつと考へこむ、河村は一体に絞<sup>クラス</sup>でも寡黙家を通つてゐた。だががつちりと、底力のある、漁村で鍛えた体軀には、いつも生々した生氣が漲つてゐるかの様だつた。尾木はいつか、童貞問題に花が咲いたストープ會議に、皮肉な北叟笑を、口邊に浮せ乍ら、傾聴してゐた河村の顔を思出した。

“さうさう、明日、相良が来るさうだ。”

“手紙でも出したのかい。”

“ウン、君が淋しさうにしてゐるから。”

尾木は、河村の思ひやりのある心根を咀嚼する前に、河村と相良といふ、滑稽な對照に驚かずには居られなかつた。ね、ちり屋の河村に比して、相良は、雲雀の様に朗かな、土耳其玉の様に淨かな性格の男であつた。此の親しみ易い豊かな、相良には、一面河村の様な目に見えぬ、迫力は、なかつたがその卒直な生眞面目さが尾木を、引きつけて餘りあつた。彼は相良に接するといつても、言ひ様のない甘えた氣持になれるのであつた。

生活の變化に對する子供らしい期待に感受性の強い尾木の心は、自と浮立つてきて、今まで閉ぢこめてゐた憂鬱な壓迫も靦面に薄らいでくる。河村は計畫の効果を樂しむものの様にちつと、尾木を見つめてゐる。尾木は、櫟ぐつたい氣持に成つて、聞き覺えたツルヴージュの一節を歌ひ始める。

いつとはなしに、しつとりと夜露がをりて、うそ寒い潮風が肌をなでてゆく。

## 二

灼けつく様な眞夏の陽が水面に反射して、空も濱もぎらぎらと金屬的に輝いてゐる。相良を加へて、三人は小舟を乗り廻し乍ら蛤取りに餘念がない。河村の操る鱸籠の周期的な軋りに、應揚な搖ぎをみせて、でれりとした水面を、わつて舟は、進んでゆく。と、しみ通る様な陽ざしに、もやもやと、小石大の白い塊が水底に浮び出す、ぎゅつと抑へた鱸に舟が緒突なあふりを喰つてぐつと止る。

“それッ”と河村。飛び込んだ尾木の跡に、飛び散る沫を残して、吸ひこむ様に渦が巻くと、むくむくと頭がでる顔がでる。

“取つたぞ”しつかり握つた拳をさし上げて、鯨立ち乍ら叫ぶ。

“旨いッ”絨縁で覗きこんでゐた相良が小犬の様に躍り上つて喜ぶ。

“もう幾つになつたい?”と河村。また舟が動き始める。攀ちのぼつたばかりの息切れした尾木は筏の中を引き搔き廻し乍ら、

“まだ廿三しきア無い、……相良君今度やらんかい。”

“僕かい、やれるかナア。”

“やれるさ、思切つて飛びこんぢまへ。良い加減眼を開けてみい、ちゃんと眼の前に蛤が待てらア。”

河村は、物ぐささうに、

“午後になつたら人が少し殖えた様だなア。”

海水浴場とまでは行かなかつたが、比較的遠淺なのと、A市を、中心とした郊外バスの通路

に當つてゐたために、かうした良い日和には、可なりな浴客で賑つてゐるのである。

“愕いたよ。KやMみたいな、海水浴場と違つて此處は閑靜な超俗的な海濱だとばかり思つてゐた”相良が撫然として答へる。

“氣の毒したナ、ハ、、、だがみい、あの燃える様な赤や、燻んだやうな紫が纏れあつてゐる様はまん更ぢやないね。いやに肉感的な、挑發的な、……ハ、、、”

俺はこんな時が一番痛快だよ、自分の本然の姿をみせつけられた様でな。”

河村の潤達な笑ひに相良は呆然として、憑かれた様な凝視を、つゞけてゐる。

不快な想念を抑制する時よく經驗の乏しい人のする様に尾木は、考へまい考へまいと努めたが、堰を切つた流れのやうに、溢れるやうな力で得たいの知れぬ意欲が襲ひかかってくる。つい今の先まであんなに平靜な清澄な氣持で居られたのに、と、怨めしく河村を盗み見る。河村は、何の感興もない様に、そして彼自身、此の一人の友に與へた大きな氣持の變化にさへ全く、氣付かぬやうに平然と舟を漕づける。

“おい、一泳ぎやらうか、尾木、君もつと取るか、”

何の蟠も淀みもない河村の口調にいぎたなく拘泥してゐた彼自身に、消え入りたい恥しさを感じ乍ら、

“相良どうする”と、逃れる様に答へる。

“泳いでもいいよ、でも一つ取つて見ようかなア”

何時の間にか、舟は距離を縮めて、フェアリの様に連れ合ふ多彩な一群に近づいてゐた。

“おいどうするんだい”

“何アに、割り込んでやるんサ、此の邊の奴等はみな圖々しいから強腹だ……”事もなげに、河村。

此奴は、こんなことをして居乍ら何のこたわりも感じないのだ、尾木は、時計をセコンドのやうに高まりゆく、脈宮の鼓動を、悟られまいと、努めながら、氣が遠くなる様な鈍痛を肢體に感じてゐる。舳に軽いあふりの音を立て乍ら、舟はみるみる接近してゆく。相良は、黙々と珠數を爪繰るやうに間斷なく泡立つ渚をみつめてゐる。

“哈、たいマ”艶かしい聲が尾木のすぐ横でする、淺黄の水帽を被つた、丸顔の女がしたるさうに舳縁につかまつてゐる。ハツとすると、少し離れた一團が関を合せてはやし立てる。

“持つてるぢやないか”相變らず筋一つ動かさぬ肉厚な河村の顔。

ぐわんと打ちのめされた様な衝撃を全身を感じて、尾木は、懸命に手、足を動かした、やがて昏睡するやうな息苦しさにくつたりと浮び上る。ホツと、氣付くと、舟から十米も沖合にぼつかり浮いてゐる。舟の廻りには、取り取りな色彩の水着をつけた女共が寄り集つて、疳高いぢ、やれ聲が聞切れに聞えてくる。仁王立になつた河村が何か言つてゐる、相良が居どころのない様に滑稽な程固くなつてゐる。切迫してゐた息を氣長に整へると尾木は、ゆつたりと立ち泳ぎ乍ら眺めてゐる。硝子玉のやうに透明な空には、氣紛れな刷毛雲が悠然と弧を描いてゐる。と、どう交渉が成立したか河村が女共を舟に乗せ始る。そして、いつに變らぬ衍氣の無い調子で艫を操り出す。相良は舳の尖りに痛さうに腰かけてゐる。過度の重みで沈みさうになつた舟

舟は方向を轉すると彼の方へたよと進み始る。

嫌な奴だ

追ひつかれたい様な、追ひつかれたく無い様な、妙なときめきを感じ乍ら尾木も緩かに沖に向つて拔手を切り始る、傾きかけた陽がちつと融けるやうに灼熱してゐる。

### 三

廣いと云つても田舎家である。ごみごみした立戸や、間の抜けた部屋や、むんむんする潮の香が神経質な尾木には、息づまりさうに思へた。氣の進まぬ河村を引張る様にして外へ出た時は日長な夏の日も、とつぶり暮れて、名も知れぬ夏虫がじじとすだいてゐた。漁村とは言へ海とは小高い砂丘を距ててゐる爲、田園的な興趣を少しも殺がれてはゐなかつた。ずんぐりした藁葺の家並や茂り合つた雑木の小路を、抜けると、其處には海の様子に廣々とした夜の田園が果てしなく横つてゐた。さう云へば村々に明滅する灯も漁火の如くうらんで見える、今宵も、降つてくる様な星夜である。

……それを思ふこと屢にして、且長ければ長い程常に新にして増し来る、感歎と崇敬とを以つて心を充すものが二つある。それは、わが上なる星の輝く空と、わが内なる道德律とである……

朗吟する様に相良が言ふ、

“おい何んて形而上學的な夜だろう、

此の底冷える神秘な靜謐がしめつける様に僕に思索を迫つてくる、僕は星の洗禮でも受け

てるやうな氣がするよ。……”

すなほ、な相良の詠歎も尾木にはしつくりこなかつた。彼には、求むれば求むる程、さうした氣持が遠のいてゆくやうに思へた、そして相良の言ふ神秘的な夜の暗さの中にも、言ひ知れぬ官能的な意欲が蠢いてゐるやうに感じた。

“さうかなア—俺は又見たことはないが、スピネロ、スピネリーが描くといふあの惡魔的な繪を想ひ出すよ、さう云へば、蠟蠟の脊かなんどの様にうねうねした山々も、惡魔の寢姿の様に見えるし、そこ、ここに、瞬いてゐる眠る様な灯も、人を破滅に誘惑するといふ妖火に思へる。河村は吐き付ける様に言ふと、促す様にのそのそと歩き始める。彼は、長々とほの白い浮出して見える、縣道とは反對に海岸に通ずる木立のこんもりこみ合つた眞暗な路に折れる、相良も残り惜しさうに、隠れてゆく、夜の景色を木立越しに見返り乍ら、黙々と歩を運ぶ。

暫く行くと、さすがに錯綜してゐた木立の茂りもブツツリ切れて、物怪のやうに盛り上つた青白い砂丘がちよつとした空地を置いて横つてゐる。

と、小刻みな水の滴りが夜の脈膊の様に耳近く聞えてくる。

“おいちよつと待つて呉れ”

尾木は湯上りの尻をはしよると舟を逆にしたやうな藁葺の中へ下りてゆく、其處は道路から三四尺も下つた窪地に自然に湧きでゐる泉であつた。尾木は、青冽な水で口を浚ぐと蘇つた様なはつきりした氣持になつた。

と、破れた藁の隙間から一筋の、冷い光が滲み通る様にさしこんで、たぎり溢れる、水の面を、

仄かに照し出してゐる。ぢつとみつめると、其處には、水に濡れた小蟹が石のやうにぢつとしてゐるのだつた。

さうした蒼白い感觸に浸つて居ると、迨還した彼の氣持も徐々に沈澱してきて、言ひ知れぬ透徹した落付を取戻してくる。と、村外れで抱いた相良に對する濁つた衍氣がうら、恥しく悔いられてきて、訴えたいやうな、甘い感傷が湧いてくる……。

河村に促されて三人は又歩き出す。通路になつた砂丘の切れ目から、蒼黝い海の面が白い齒をむき出すやうに波立つて覗いてゐる。少し坂になつた砂路を登りきつた時、死んだ様な此の世界とは凡そ不調和な壓縮された人の話聲が聞えてくる。河村はツト立止つたが思直してか足荒に歩き始める。夜露の下りた砂がしつとりと彈力を帯びて、サツクサツクと異様な、いだつた反響を波打たせる。胸を絞る様な好奇と名狀し難い豫感に、思はず足速に河村に續いた尾木も相良も、ぢや待つてろよ、といふ、せつばつまつた男の聲を聞きつけた。ぱつと開けた薄墨色の視界から脱兎の様に走り去る、すんぐりした男の後姿が見える。河村はつかつかと、取残されて戸惑ひした、夜目にもそれも見える女に、近寄つて、何か、訓戒めいた事を言つてゐる。見てはならぬものを見た時の様に、無氣味な戰慄に、二人は肢体のサブイボを感じてゐる。

尾木は、河村の言つた言葉を今更の様に思出して、しほしほと、砂丘の切目に消えてゆく、女の姿をみつめ、乍ら、スピネロ・スピネリの書を空想する。

驚いたかい……と冷かす様に河村が言ふ

河村、まさか之が此の村の常習と言ふんぢやあるまいな。相良の痛走つた聲が震へてゐる。

ハハ……、お氣の毒だが、まあさうだ、なにも此の村に限つたことアないよ。一体にこんなもんなんサ。

投げつけるやうに言ふと河村は、片方の下駄を、下敷に、汀に近い砂の上に腰を下す。尾木は、いたいたしいまでに打碎かれた相良の横顔を、いたわりたい様な面地で眺めてゐる。がその失望に蒼ざめた頬にもみるみる内に血走つた昂奮の色が現れてくる。

お、何と云ふ悖德だ、何といふ淫亂だ、河村、君はよくも、恬淡としてそんなことが言へる。

悖德？、何て滑稽な言ひ方だ、相良、俺はさうした言葉が一番癢にさわるのだ。さういふ君自身はどうだ、此の言葉に對して、少しの控目も感ぜない丈の自信があるか。

君こそ滑稽だ、いや卑怯だ、君は君自身の醜さに打ちまかされて、良い加減に妥協してゐるのだ、そして、少しの批判も穿鑿も無く、その醜さを肯定しやうといふ、その悟つた様な口吻も實は、鼻もちのならぬセンチメンタリズムぢやないか。

君は君自身、今の先まで描いてゐた、甘い、プラトニックなユトピアが現實の皮肉なメスで打ち壊された口惜しさに昂奮してゐる。而も、その昂奮のために物そのものの認識をさへ胡魔化してゐる。何故醜かつたら不可ないのだ。醜い物は醜いと、堂々と認容して行つたらいぢやないか。君は變な眼隠しで人生そのものから逃避しやうといふのか。



「君が自然主義だと自惚れてゐる、その『ザイン』の理論も、實は單なる、瞬間の衝動に生活の最後の基礎を置かうとする利那主義でしかありやしない。君は何といふアマラリストだ」

「アマラリスト!? 善し君がさう言ふならそれでも良い、俺はニイチエと共にアマラリストたることを堂々と宣言しやう、そして君の様な、人間そのものから離反した、夢の様な道義家を排して力強く自分自身をみつめて進んで行くよ」

「君は少しだつて人生を哲學してゐない、否、しやうとさへしてゐない。君は、時代と境遇にカモフラージュされて、自己そのものに喰入つてゆくことさへ出来ないのか」

「君こそ吐き出したいあの浪漫主義時代の骨董品だよ。彼の原始時代の吾々の祖先を思ふがよい。あれが紛飾拔きの人間の姿なんだ」

カント。やヘーゲルが如何に勿体づけやうと、結局人間は本能の動物さ」

「いいや、總ての道德意識はフィヒテも言つてゐる様に進化的過程の所産なのだ。其處にこそ人間的な進化があるといふものだ。君は好んで、本能のいぢけきつた奴隷に甘んぢやうとするのか」

極端にまで違つた、然しあくまで強い性格の二人の果つべくもない激論に、尾木は放心した者の様に聽入つてゐる、長い間、影の形に沿ふ様に彼を苦しめてきた問題について彼の事毎に衝突する兩面を、刻明に象徴してゐる此の二人の友が、必死に、鬨ぎ合つてゐるのを思ふと、それは單なる他人の議論としてではなく、彼自身の内に、即々とした反響を捲起するのであつた。

「それア君の様な男のことだ、ショベニハウエルの様な倫理觀は向かないかも知れぬ。然し

少なくとも

「ベンザム」流な倫理觀は否定できまい。

「勿論俺は、それ程までエゴイスチックぢやないよ。然し、君の様に拘泥するのは眞つ平だ。内在原理だの絶対精神だの、ひどいものになると、神だとか本體だとかに自らを縛つたり祭り上げたりする。俺に言はせたら、憐れむ可き衍學的な道化者さ」

「君はアルツイ・バーセフの様に汚い物を、ばらまかうと言ふのだ。そしてデカタンな癡癡に嚴肅な人生を、逃避せようとする。君は本當の思索といふものを知らない。愛も知らない。

カントも言つた様に僕達は僕達の意志の格率が普遍的な立法の原理となるやうに行動すべきだ。いや其處まで行かなくちや嘘だと思ふ。」

「君の金科玉條たる其のテレオロギーも結局は現實と何の交渉もない理想論さ、排氣鐘によつて、完全な眞空の出来ない様に、どんな絶対意志だつて理性を本能の一切の制約から獨立させ得るものが、愛は本能さ、そして唯それ丈さ」

「いや、違ふ、本能的愛は愛の純眞なるものではない、とらはれた、エゴイスチックな愛は眞のものではない、愛は意識的な、理智的なものだ。トルストイも言つてゐる、眞の愛の可能は、人が、その、動物的個我的幸福の爲ではないことを理解した時にのみ始まる。……とね、君のやうな本能的衝動論の何處をついたら合理的意識の閃發がある。僕は敢て言ふ、君のそのシニツクな口吻の裏面には、あのあばずれ特有の捨鉢が潜んでゐる。……君は悪い夢をみてゐる。」

「君こそ感激のために正當な自己批判を等閑してはせんか、君の言ふ愛は、實に實在的な、我々の認識外の所産だよ。第一君自身愛する資格があるか」

「勿論無い、然しそれは少しも僕の敗北ではない、僕は僕のこの信念に向つて精進して行かう。」

「アンドレーフの「霧」の中の青年の様に君は「汚い汚い」とか、こちやら死んでゆくのかい、たまらないよ實際。相良。君はドリーマーだ。その心の内に未だ蟠つてゐる、生若いロマンチックな残滓が最後の所で君を阻んでゐる、くだらんよ。」

「君はヘアトリチエを戀したダンテを知らない。ゲーテの「永遠の女性」に憧れた靈魂の祈りが聞えない。ハインリッヒの様に、青い花を尋ねてさ迷はう。」

「だがいつて置く。存在の世界から價値の法則は生れて來ない。やがて君にも思想的な動亂がくるに違ひない。」

#### 四

御來迎のやうな多彩に織りなされた黄昏の空に陽を浴びた夕鴉が二三羽應揚な輪を描いてゐる、薄黄ばんだ田の面が渚のやうな曲線になよなよと蠕動してゐる。道に沿ふた小川にはいつか夕靄が乳色の礬水ワタヅミを引いてゐる。

天も地も一瞬、名狀し難い宗教的法悦に浸つてゐるかの如く闇として音もない。

尾木は昨夜來の慌しい心の生活を忘れたもののやうに、うつとりと、神秘的な自然のプアントマイムに甘美な感傷を覺えてゐる。

「尾木。此の盧花風な田園の風景も氣紛れな、造物主のメーキアップに過ぎないかと思ふと俺は、腹立たしい程憂鬱になつてしまふ。俺はどうしても相良の様な美しいイリユージョンに陶醉する氣になれないんだ」

河村はうなだれ勝ちに歩を運び乍ら泌々した口調で言ふ。

「だが河村、俺には相良のあゝしたつきつめた氣持が解る様な氣がする。」

かうして夕映に薄らいでゆく大自然に對してゐると、やはり幽邃な神秘的な靈感が犇々と感じられるよ。少なくとも、此の刹那だけは俺も魂が淨められた様な安らかさを味ひ得られる。」

尾木の腦裡には今別れて來た相良の眞剣な顔付が幻のやうに明滅する。

「僕は一時だつて魂の醜さを肯定することはできない。そして此の淫樂な現實を見せつけられれば、られる程益々僕の聖なる實在への憧憬は強くなる。僕は魂の清さを信ずる、靈の尊さを信ずる。『聖靈に祈り、信仰に徳を立てよ』ユダもさう諭してゐる、僕は、此の淫亂な時代に挑戦してあくまで、純情を守り續けて、ゆかう。幻滅の一夜に絶望的な苦杯を舐めた相良はさう言つて其翌日惶惶としての漁村を去つたのである。信ずるものに對する此のせつばつまつた相良の行動は、其の主張の如何を超へて、尾木に多大の感銘を與へずには、措かなかつた。」

尾木は、その何れにも去就し切れない自分に、あぢけない淋しさを感じ乍ら、此の徹底し切つた二人の心理に、今更の様な不思議さを覺えるのであつた。

「君も天國黨かい？。何なら是からでも、もう一度<sup>↑</sup>まで送つて行くよ、相良の後を追つて天國行脚にでも出掛けたら良い、<sup>↑</sup>とは、此漁村から一里程離れた小さな驛のある町である。」

「皮肉かい、それにしても君は餘りにも強すぎる、相良の言つた様に河村君はメイフストだよ  
「俺が強い!?、俺が強いのでなくて、君等が大甘ちやんなのさ、君等は何かに甘え付いてな  
くちやゐらないのさ、乳飲みが乳房にしがみつく様にね。」

「君はそれで本當に充されてるのかい。何の後めたさも感ぜず……。」

「勿論、……人生は地獄だと始めからきめてかかりやあね」

「だがよく、人生は地獄だなんて取りすまして居られるな、俺なんざ、とても淋しくてや  
り切れない、といつて相良の様にもし切れないのだが」

尾木は言ひ乍らフト妙な氣持に襲はれる。

天國と地獄。彼は心の中に呟き乍ら模索するやうに此の奇妙な然し何とはなしに親しみのあ  
る對照に考へ耽る。と、霧の中にまどろむ灯のやうな捕捉し難い、然し一種啓示的な嘯きが起  
つてくる。

天國と地獄の結婚!、尾木はハツとした。

何時耳にしたかそれすらはつきりせない、ブレークの言葉が今突然、彼の記憶の中に生々し  
く蘇つて來たのだ、そして深く嚙みしめるもののやうにもう一度呟いた。

天國と地獄の結婚

彼は滾々と湧いてくる其の妙味に今更の如く充實した喜びを感じて深く深く呼吸するのであ  
つた。

陽の沈みきつた間近かな地平線に、暈光に似た仄かな光が紫紺に煙る漁村を和やかに浮出さ  
して居た。

## 鍵 (一幕)

福井健一郎

人——母親。

娘。

男の子。

下男、(佐助)

時——現代。晩秋の黄昏。

所——ある山村の小地主、相當の舊家。

舞台。正面に土藏がある。土藏の扉は開いてゐて、暗く空虚な影が覗いてゐる。右手は母屋  
の方につづき、左手に遠く田圃が見晴らせる。土藏の前に、整頓して大根が干してある。

遙かに汽車の汽笛がつたはり、それと同時に靜かに幕開く。

男の子。土藏の前に腰を据えて兩手に大根をいぢつたり、恨めしさうに土藏を見たりする。

男の子。(ずるさうに立ち上り、土藏の方に向き直る) お母ア——

間

男の子。お母ア——なあ——柿くれんかい。お母ア——

母親の聲。(土藏の奥から叱り聲で) まだ云ふとるんか。ないちゆうたらないちゆうに。

男の子。(やゝ泣き聲になつて) 嘘ぢやい。母屋の棚にあるわい。嘘つき、お母アの嘘つき。

娘。(重さうに火鉢を抱えて土藏から出て来る) お前何時まで云ふとるんや。早よ行け。云ふ

こときかんと、又お母アにこん中へ入れられるやないか。(云ひつつ火鉢を置く)

男の子。藏なんてこわいことないわい。

娘。阿呆!。ほんなら勝手にせえ。もう藏へ入れられても、わしや知らんぞ。(云ひ残して藏

へ姿を消す)

男の子。お母ア——なあ——お母アちゆたら。

母親。(突然走り出て来て、多少ヒステリカルな聲で) まだ云ふとるんか。この子は!

男の子。お母ア——

母親。よしやろ。こゝへ來い。(云ひつつ男の子を掴まうとする)

男の子。違ふわい。違ふわい。(と叫びつつ右手へ逃げ去る)

母親。(男の子の逃げ去るのを見つめて、太い息を吐く) ほんに困つたもんぢやなあ、あの子

は。

娘。(火鉢を抱えて出て来る。母親に) あととりやと思ふて、あんまりお母アが甘やかすでや。

母親。お母アはすいぶん<sup>ビツ</sup>虐いつもりでをるんやぞ、こいでも。あーあ、父つあんが生きとつたらならなあ。

(再び汽笛が遠く聞えて来る)

娘。(汽車の通る丘の方を眺めて、思ひに沈む様子) ほんになあ。父つあんが生きとつたらな

あ……

母親。何や。

娘。何でもないけど……。

(間)

母親。お前、この頃汽車の方ばかり見とるやないか。……まだ峯吉つあんのことが忘れられんのか。

娘。ほんなこと、いつまで思ふとつたかて、きりがあらへん。あんまり田圃が綺麗でなあ——

お母ア——ほら、丘の向ふに……

母親。お前。(と娘の顔を覗き込む) ほんなこととしてお母アをだまさうと思ふとるんやろ。お

母アはちゃんと知つとるぞ。

娘。知つとるて。何をや……

母親。(話すうちに次第に叱り聲になる) 何をて、みな知つとる。峯吉つあんのことでもな。

お前のためやと思ふて黙つとつたけど、……………お前、あんまり長すぎるやないか。いつまでもくよ／＼峯吉つあんのことばかり……………。

娘。お母ア——（云つたまゝ俯向く）

母親。お母アの身にもなつて見い。勝手なことばつかり考へて！

娘。ほんな無茶なこと云ふたかて……………わしは何にも知らんやないか。

母親。何が知らんことあるもんか。父つあんがをらんと思ふて、お前までわしを阿呆にするんやな。昨日も峯吉つあんから手紙が来たぞ。こいで二遍目やないか。

娘。お母ア。ほんとか。何で早よ見せてくれんのや。

母親。阿呆云ふな。見せてやる位やつたら、何でかくしたりするもんか。

娘。あんまりや、お母ア——ほんなことまでせんかて……………

母親。（きつとなつて）何があんまりや。ほれ見い。そいつが證據ぢや。今でも峯吉つあんのことを思ふとるんやろ。お前は。

娘。……………

母親。何や。あんなしょうもない男。何であきらめられんのや。一寸はわしのことやら家のことも考へて見い。山も無うなるわ、畑も少うなるわ。藏の物もこんな空つとるんがわからんのか、お前には。……………これもみなお前の嫁入のためや。よう考へて見い。こんな結構な縁組は又とあらへん。ほやなかつたら、お母アかて、藏の物を賣つてまで一生懸命にならへん。まあ、峯吉つあんと定さんと較べて見い。峯吉つあんのどがよいんぢや。身上も違

ふし、男前かてずつと定さんの方が上等やないか。峯吉つあんなんで、お前……………。

娘。（反抗的に）お母ア。何で峯吉つあんの悪口ばつかり云はんなんのや。わしは、お母アのためやと思ふて、峯吉つあんのことはあきらめとつたけど、ほんなことまで云はれると……………わしかて……………身上が何になるんや、男前が何や。わしはほんなもん何とも思はへん。

母親。こら、何を云ふんぢや。この娘は。お母アの苦しみがまだわからんのやな。お母アの云ふことがきけんなんて……………父つあんが死んでから、とう／＼山も賣つてしもた。女一人やと思ふて村の人はわしを阿呆にする、小作米かてきちん／＼持つて来る人はあらへん。お前も一寸はお母アの味方になつてくれたらどうや。味方どころか、わからんことばつかり云ふとる。

娘。ほんなら何で 峯吉つあんと一緒にさせてくれんのや。わしかて、家を貧乏さしてまで定さんのお嫁になりとない。何ぼ身上があつても、百姓なんてわしはもうこり／＼や。一生いやな百姓して暮す位やつたら……………

母親。こら、わからん娘ぢやなあ——ほんとに。この頃若い娘は月給取り／＼云ふけど、月給取りのどがよいんぢや。一月四十圓か五十圓もろて、そいで樂に暮らせると思ふとるんか。娘。誰も樂に暮らせると思ふとらへん。思ふとらへんけど、ごちや／＼した百姓より何ぼましかわからへん。

母親。そら百姓はつらい。お母アかて樂やと思ふとらへん。けど定さんとこは又別や。お母アでも行きたいくらゐぢや。定さんの嫁なら村の人にも恥しない。

娘。お母アは村の人／＼と云ふけど、何でほない村の人に氣兼ねんならんのや。わしはほれが大嫌ひや。

母親。阿呆云ふな。世間へ恥晒して佛さんに申譯が立つか。墓の下で父つあんやら、婆アさんが泣いとるぞ。ほんな勝手なこと云ふて。お母が苦しむのはみなその爲やないか。家中が空つぽになつたり、お前が峯吉つあんとかつゝいたりして見い。家はよい恥晒しぢや。

娘。ほんなことを心配しとつたら、何にも出来んやないか。お母アは村の人ぢや、恥晒しぢやちうて、自分勝手に苦んどる様なもんや。貧乏やのに金持の眞似をせんでも、貧乏になつたら貧乏らしい暮したら、それでよいんや。

母親。阿呆。お前は家がどうなつてもよいんか。お母アが後指さされても平氣なんか。お前みたいなお母アをようわしは生んだもんや。

娘。(沈黙して大根に眼を落す)

(間)

母親。(獨り言のように) もう勝手にせい。この火鉢も金に代へようと思ふて出して來たけど、たつた二つしかなかつた…………。

娘。お母ア——(後の言葉は出ない。土藏の壁に顔をあててしく／＼泣き出す)

母親。もうよい。好きな様にせい。ほんとに、父つあんが居らんばつかりに…………

(男の子。暫く前に右手から出て來て、怪訝さうに二人の様子を傍視してゐたが、この時母親の方へ歩みよる)

男の子。お母ア——

母親。何ぢやいな。

男の子。柿くれんかい。四時すぎたらやるちうて、もう五時半やぞ。

母親。もう飯やないか。飯まで待つとれ。

男の子。いやぢやい。飯まで待つとつても、飯食ふたらよいちうて、又くれんのぢや。わしは知つとるぞ。

母親。あたり前ぢや。腹が空つたら飯食へ。柿なんて、ほんなもんがあるかい。

男の子。嘘ぢやい。わしは知つとるぞ。母屋の棚にあるわい。

母親。しぶといな、この子は。無いちうたら無いんぢや。うちは貧乏やで、ほんなもんはないんぢや。

男の子。嘘つき。彌吉つあんに柿くれちうたら、お前の家は金持やさけ、家へ歸つて何ぼでも貰へ、ちうたぞ。

母親。あ、あほ。云ふこと聞け。

男の子。(母親の權幕に恐れて、逃げ腰になりながら泣いてゐる娘の裾を引つづる) 姉ちゃん。棚の上にある柿をとつてくれい。なあ——わしは背丈が届かんのぢや。

娘。(靜かに男の子の方を向く) お前もお母アの云ふことをよう聞け。(母親の顔を恐る恐る覗きながら) なあ、お母ア——さつきは、あんまりお母アが峯吉つあんの惡口云ふで、わしもひどいこと云ふたけど、前からあきらめとつたんや。わしでもお母アの子やさけなあ——ほ

いでもお母アが出て行け云ふんやつたら……（と又泣き聲になる）

母親。何も泣かんでもよい。ほんならほんでよかつたんや。さ、早よ出す物は出してしまはんと日が暮れる。……（と娘を促して土藏へ入らうとする）

男の子。（癩癪玉が破裂したと云ふ体で）えいッ——お母ア。くれんか——い。くれんこの大根を無茶苦茶にしてやるぞ。

母親。（きつと振り返つて）ようし、して見い。又藏へ入れてやる。

男の子。入れて見い。今日は藏なんて怖ないわい。

母親。何やと。入れてほしいんか。ようし。こら待て、こら。（と男の子の手を掴んで、直に兩手で軀を抱き上げる）

娘。あ、あ、お母アそんなことをせんと……

（娘の驚いてゐる暇に、母親は男の子を抱き上げたまゝ土藏へ走り入つて、男の子を残し去り、出るや否やガラ／＼と扉を閉めてしまふ。扉の下三分の一は板格子であるが残り金網になつてゐて、男の子は顔だけが見える）

母親。さあどうぢや。夜になつたかて、もう出してやらんぞ。

男の子。（平氣な顔をして土藏の中を走り廻つてゐる）ほんなこと位、平氣ぢやい。……わい、廣いなあ、相撲でも、野球でも何でも出来るぞ。

母親。こ、こら。もうすぐ鼠が來て足を咬むぞ。蛇やら、いたちが出て来るぞ。

（母親は多少ヒステリカルに晒然として男の子の動作に眼を送つてゐる。娘は男の子の恐れ

ないのを不思議に思つて、やはり彼を眺めてゐる）

男の子。何も怖ないわい。……入るんやつたら入つて來て見い。鍵をちゃんと隠しといたで、誰もよう入らへんぞ。

母親。（驚いて）鍵を、鍵を。阿呆！ 鍵を隠したらお前出られへんやないか。阿呆！

男の子。だましたかて云ふてやるもんか。ほんなこと云ふて、入りたいんやろ。

母親。何、何を云ふんぢや。阿呆！この子は！早よ云へ。何處へやつた、鍵を、え、云はんかい。

男の子。云ふてやるかい。云ふたら天地がひつくりかへるわい。

母親。鍵がなかつたらこの扉が開かんやないか。扉が開かなんたら、お前出られへんぞ。早よ云へ。何處へやつた、鍵を。

男の子。（初めて悟つた様子で急にわつと泣き出す）

母親。えい、い。仕様のない子ぢやなあ。泣かんと早よ云へ。

男の子。（ます／＼大聲で泣くばかり）

母親。（次第にあせつて來る）こら、早よ云へ、もうよい、泣かんでも。こら、云はんかい。

（娘に）あゝお前。何處か行つて探して來てくれんか。

娘。何處やろなあ。

母親。何處でもよい。わからんさけ探すんぢや。早よ行つて！。

娘。（右手へ走り去る）

（この頃から、眞赤な夕焼が土藏の壁に映じ、壁は次第に鮮紅色を帯びて來る。）

母親。云へちうたら早よ云はんか。云はんと大きなやいとをすえるぞ。

男の子。あ——ん、あ——ん。云ふわい／＼、やきつあんこの、お母アが、あ——ん、あ——ん（と又泣いてしまふ）

母親。彌吉つあんこのお母アがどうしたんぢや。さ云へ。柿もやるさけ……

（佐助。左手から出て来る）

佐助。おかみさん。（泣き聲に、遮られて、母親は氣づかないでゐる）おかみさん。

母親。何や。佐助やないか。お前鍵知らんか。

佐助。へえ。知りまへんな。

母親。（直に男の子の方へ向き直つて）さ後を云へ。さ。

佐助。おかみさん。久太郎さんやら、村の人が大勢來なさつて……おかみさんに會ひたいち

うて……

母親。何。久太郎さんが？

佐助。えい、みな紋付で……

母親。又來たんか。邪魔くさい。小作料まけてくれいにきまつとる。ほつとけ、そんなこと……

……

佐助。ほんなこと云ふたかて、おかみさん。

（男の子は更に烈しく泣きつゞける）

母親。きまつとる。それに……小作料はまからんちうて、歸へしてしまへ。……ほんまに

阿呆にしとる、女や思ふて。……えい。よう泣く子ぢやなあ。早よ云はんかい。何處にあるんぢや。何處に。鍵がなかつたら、お前出られんのやぞ。

（佐助左手へ去る）

男の子。やきつ、つあんの、お母アが、あ、あ——ん、あ——ん。

母親。はつきり云へ、はつきり。

（娘右手から出て来る）

娘。お母ア——家中探したけど、わからんぞ。

母親。彌吉つあんのお母アぢや。お母アがどうした。ほんまに阿呆ぢや、お前は。早よ云はんと乞食に行かすぞ。

男の子。（たゞ烈しく泣くばかり）

母親。云はんのか、お前は。（云ひつゝ金網をとん／＼叩く）

（佐助。再び左手から走り出て来る）

佐助。おかみさん。おかみさんやないと話がわからんちうて……

母親。えい。ほつとけ。早よ云へ。お前は。あんまり泣いてばつかり居ると……

娘。さ、早よ云へ。わしがお母アにことわり云ふてやるさけ……もう泣かんと。

男の子。（泣きじやくりながら）彌吉つあんの、お母が、こんな鍵は、あ、あ——んあ——ん

母親。はつきり云へ。はつきり。

男の子。こんな鍵は、藏の鍵ちうたかつて、何にも藏にはないさけ……



母親。あ、阿呆！阿呆！この子は！

佐助。おかみさん。

母親。もう云はんでもよい。阿呆め。明日までこうしてほつといてやる。阿呆め。

男の子。藏の鍵ちうたかて、何にも藏にはないさけ……

母親。もう云ふな、阿呆、

め！（と云つたはづみに足を踏み違へて、どつと大根の上へ倒れかかり、ポキ／＼と五六本折つてしまふ）

娘。あ、お母ア——（とかけよる）

男の子。あ——ん、あ——ん（と絶望的に一層烈しく泣きつづける）

（急に眞赤な夕焼は薄れて、闇が迫つて来る）

幕

一九三二、一、二五

## 神祕なるものゝ姿を求めて

佐野東徳

吾々が『私は此處に居る』『机が其處にある』と云う。然しこゝに『居る』とか『在る』とかは如何なる意味であらうか、一般に存在とは如何なる根據を有するであらうか。實在の確證は何處にあるであらうか。

凡そ認識と云ふ場合には何時でも主観、客観の對立が豫想されてゐる。即ち認識するものと認識されるもの、時間的に永遠に流れ動き働く認識作用と之を超越する對象との對立とが考へられなければならない。有るものは何かに於てなければならぬ。有るもの自身を發展し維持し其の中に成立せしむるものが考へられなければならない。對象と對象との連關係、純粹作用統一としての我と非我との對立關係の底にそこに於て働くものがなければならぬ。働くものの自己限定として場所（東洋的詩的意味を加へて座と云ふ）が考へられる。勿論場所とは單なる物理的空間を意味するのではない。ノエシス的方向のノエマ的限定が一般に時と考へられる。併し限定するものなき自己限定作用、即ち無にして自己自身を限定する自覺的限定が時と云ふことが出来るであらう。斯く見るものなくして見るものゝ自己限定作用の『於てあるもの』として場所と云へるのである。自覺に於ける深く廣い照らされたる意識の原（無限の意を含めて）を云ふのである。

自覺とは自己が自己に働き、維持し、發展し、働くことが知ることであり、知ることが働くことである。自覺面に於けるノエシス的なもの、ノエマ化を意味するのである。自己が自己に於て自己を見る一般者の自己限定としてのあるものとしての承認の根柢、一般に存在の確實性の根據にすべて自覺的の意義をもつてゐるのである。あるものは何等かの意味に於て限定せられたものである。個物は常に一般者の自己限定として考へられる。然し見るものなき自己自身の限定面、自覺的限定即ち場所に於て眞の自己の根據を見出すのである。自覺的存在者としての個物はその純粹性に於て自己自身の中に自己發展の特殊化原理を含んでゐると考へられる。純粹に自己自身を限定するもの、ノエマ的自覺として場所的限定面がやがて客觀的世界として現前する。あくまで主語的方向を支持するものに一般眞理の根據を求めることの出来るのはかゝる自覺によつて基礎付けられることを意味するのである。ライプニッツがモナッドの中に全世界との關係を含むと考へたのも、一あつて二なき生命の存続も、かゝる場所に於いてゐなければならぬ。聖パウロの我生くるにあらずキリスト我に生くるなりと云ひ、親鸞が呼び聲はやがて親鸞否一切衆生に對する呼び聲となつて聞えた時既に此の境地に立つたのであらう。

自覺に於ては自己自身の作用を對象とする反省が直に無限的に自己發展の働らきとして進むのである。靜的我が直に動的我と同一である。超越面に於ける兩者の無限の没入であると考へられる。かく考へたとき兩者の背後に何等かの意味の連續關係がなければならぬ。働らきが自己自身に純粹に還るもの、考へるものと考へられるものとの全き一致、その間に時の連續を入れる餘地もなければ働くものと働かれるものとの區別すらもない一切限定を絶した意味に於て

一である。かく考へたとき無に對立する對立關係を超えて之を内に含む自己自身の限定たる絶對無を意味する。眞の自己は直接的全一運動を含む絶對無のノエシス的限定によつてあるものの、場所が直に場所を限定する限定作用に於てあるもの、自己の内に自己を見、自己に働き、自己と共に精進三昧する永恒の活動態の菩薩を見るのである。ブレイクの黄金の糸もて輪つくととはかゝる絶對無の自覺的限定に於てゐなければならぬ。見るもの、ない見るもの、働くもの、働らきの眞の自覺的宗教の境涯である。只單に自己自身を失ふことにより得られる宗教的體驗ではなく、於て働らく場所的限定面に於けるノエシス的方向にある無限の過程の自覺的限定が眞の宗教的體驗と云へるのである。場所的限定面に於けるノエシス面のノエマ面への無限の没入に於て一なる世界といふものが考へられる。而してノエマ面がノエシス面に於てある意味に従つて、即ち見るものなき見るもの、種々相に従つて多なる世界があらはれる。宗教と道德との深き内面的結合をこゝに見るのである。然し自覺的限定面に於けるノエシス、ノエマ両面を更に深き廣き場所に於ての輝しい光の投影が宗教と考へられないであらうか。一々が一なる、特殊と絶對との一致、道德と宗教との深き内面的結合、眞に具体的統一たる自覺的宗教があるのである。

一般に客觀的對象界はそれ自身に於て全き世界で吾々の主觀を以て動かし様はないと考へてゐる。一念の微も創造することは出来ない。吾々の意識現象と雖も自由に動かし得るものではないと考へてゐる。けれども認識對象界は意識界に、純粹意志は意識現象の根本形式と考へることが出来る。この意味に於て意志は自然と統一する具体的自由なる構成能力と謂へる。かゝ

る一般者の自己限定として、即ち創造作用其者の自覺の立場に入る時、照らされたる面が共に動くとき、道德的世界が展開するのである。道德的世界とは意志により構成されたる世界、人格と人格との無限なる發展關係、純なる作用の世界である。純なる作用の世界とは作用の作用即ち絶對自由意志の世界、見るものが働くものであり、働くものが見るものである、往相と還相との一なる世界である。こゝに意味と存在との結合、眞に自覺的限定面をみるのである。一々に於て存在の世界に事實として現前し、之を動かすことでなければならぬ。理論の底に實踐がなければならぬ。一般者の自己限定として或物を他物より區別する、超越的なると共に内在的構成力が考へられる。限定作用其者が限定の内容となつて實にせられる。定立の裏面に反定立を含み、肯定の裏面に否定を含む内容と形式との具體的統一是一般者のモウメントとして無限の苦痛と棄捨とを經過せねばならぬ。けれど其處には天かける日の光の緑の茂みを通して深き谷底への恵みと喜びはある。肯定より否定に、否定より肯定に移るのは肯定即否定、否定即肯定たる作用其のものの深き内面的必然性即ち作用の振動性に内面的統一の明白の根據を見出し得ないであらうか。

働くものの限定面としての現象界に於ける物は單なる性質の指定になくして變化し得るもの即ち複雑なるもの、統一である。眞の實在は固定せるものではなくして作用其ものである。働くもの、無限なる關係の内面的統一が實在である。物は單に『ある』ものではなくして生ずるものでなければならぬ。内面的狀態の自らなる連續的推移運動に於ける一點が物と考へられるのである。

與へられた自然を統一する絶對自由意志の無限に發展を藏する立場に立つとき非我は單なる自然としてではなく、働らく自我として顯現する。物心一如、我なき人なき自由無礙の純なる作用となるのである。主觀的自我欲求の對象として自然は或は障害となり或は手段となるが我なき人なき眞に客觀的自我の立場即ち純粹行に於て自然は我に對して一つの人格体となり、自然との結合は人格と人格との結合即ち社會的形式となる。カントも人格擁護の法則に於て『目的の王國』の如き純倫理的社會の形式に於て多くの他我、自然と精神との結合を意味したのであらう。

規範意識として吾人の面前に迫る自然界と精神界を超越し、統一する具體的實在の法則、純粹意志のアプリオリの上に立つ對象界に於ける法則は自覺に於ける直觀面に於ける自由なる絶對自己創造に由ると考へられる。眞に無なる純主觀よりみれば創造はすべて無より有を生ずるもの、絶對的自己限定であつて、無限的意志の創造と見る外はないであらう。然し形式に於て無限に發展する意志の自由面を持つが内容に於て所與的客觀界に逢着する。純なる意志内容として道德と藝術との結合交叉點をみる。無限に創造的な純なる情意は作用の作用として如何なるものによつても切斷することの出来ない己自身の積極的内容、力の感じを有つてゐる。自己自身の中に生命の躍動創造的意志の於て働らく場所への投影はまことベームの底いなきものの自己影像として絶美でなければならぬ。藝術的直觀は純なる作用そのものの自覺でなければならぬ。認識主觀より行爲的主觀、作用より作用の作用の立場の上に立つことによつて美の内容は與へられるのである。現在の自己の中に無限なる自己の發展を藏してゐる生産點として表

微藝術が成立すると思ふ。一度び深い我の奥底に消え失せ再び我に復歸する無限活動の中に既に深い藝術的意味を見るのである。

行爲的主觀に對しての所與を己自身を對象として見る方向に發展せしめた時それが藝術的直觀であり、超知識的に働く生命の内容、生命の表現である。純なる内的生命の表現は何時でも美と感ぜられるのである。概念の網を破つて純なる作用の立場に立つ時純美の對象界が現はれて来る。こゝに物に於て生命を得、あらゆる空間は美もて蔽はれるのである。我、物となり物、我となる主客合一の相は又深き宗教的境涯である。

自己を發展し創造して行く方向に必然的に藝術の個性化があると考へられる。勿論自己を創造してゆくのは嚴肅なる道德行爲であつて兩者共に同一の方向にあるのであるが既にかゝる行爲の基に一種の美的直觀が働いてゐると考へることが出来る。動きの中に既に美があると云へるのである。一般化の方向に進む眞なるものと個性化の方向にある美との結合は、作用の自覺的限定面に於ける照らされたるものとして宗教的內面的合一をみるのである。

愛は他に於て自己を見、自己に於て他を見る自己融合である。場所が直ちに場所自身を限定する自己限定作用の内容は愛の内容と云ふことが出来る。絶対無のノエシスの限定に沿ふて圓環的に限定して行く自己限定作用、即ちノエマ面を超えて之を内に含む方向に限定したのが自愛である。各々の場所に於て辨證法的運動を含む意味に於て自己自身を無限に擴大せんとする純粹行といふものが考へられる。絶対無の自覺のノエマ的限定線に沿うて自己自身をみたものが美である。何處までも無が無自身を求め、無が無自身を限定する作用が場所に於てある時絶

對の愛と考へることが出来、こゝに於て眞の自愛は他愛であり他愛は自愛である。汝の敵を愛すること汝を愛するが如くせよとはかくして始めて云ひ得るであらう。絶対の愛には常に美が含まれてゐるのである。余は今だにワォルツワースの我が子を失つた親が雪の夜にその姿を求めてゐるあの麗はしい詩の一節を忘ることは出来ない。

#### 附記

人生の悲と喜、苦と樂、明と暗の諸相を通じて流れる生活のリズムの明るさに目覺めるとき人は不滅の自己をみる。不滅の自己をみるとは生活のリズムをぬけて来る自然の詩を知ることである。自然の詩を知るとは生きながらにして大虚に入り、大虚に入つて始めて眞に生くるを知ることを、死して生くるの道を知ることである。自己の身体を越えて、底に流れる生命の泉に接することによつて眞の自己をみるのである。底を流れる生命の泉に於て自己融合の妙境は現出する。すべてのものこゝより出でこゝに還るのである。悲しめる者、惱める者、共に來りて生命の泉を掬しよう。そして共に悩み、共に悲しみ、共に愛し、共に喜ばう。人生の悲しみを悲しみ、悩みをなやむことは自己自身を見ることである。自己の中に自己自身をみる時喜びがある。喜びは自己が自己自身の發展をみることである。自己自身の發展をみるとは自己の中に自己を動かす生命の力を感ずることである。

## 雑記

○  
今夜は春雨のやうな雨音が軒先にひびいてゐる。じわじわとふり注ぐ柔い響はもう春の夜の惱しさをさへしのばせてゐる。げん氣よく炬燵をでて机にすわつて筆をとつてもなんとなくふくよかな雨の晩だ。もう季節がゆるんできたのかな。さうおもふと北國の二月半だといふのに雪の少なかつた今年。それにはやい季節の脚だこと。

机の花瓶にすいとび、にほひあらしいとうがさしてある。鼻の先をかすめてゆく花のいぶき。おもへば、金澤へきて三年、文藝部になつてはしなかつたけれど、みななつかしかつた文藝部の人たち。閑静な壽亭でおだんごをくつて短歌會をした。また私の下宿でも短歌會を催したらみんな寄つてくれた。明るい夜の石川屋の二階で、暖かいコーヒ、おしるこをすつて漫談會、戯曲朗讀會、詩話會、文藝批評會などを催した。理論がおこなはれるよりも各自もちまへの詩的片語がはなされた。みんな、やさしい歌人であり、無邪氣な詩人であつた。心をもとめる小さい文人であ

り、形をさがす小さい藝術家であつた。しかし必要な議論をするときには、豹のやうすばしくつて、勇敢であつた。

× ×  
ある夜、マルセル・ブルーストは水盤に水中花を投じた。そしてその上に彼の藝術を展開した。一夜、芭蕉は彼の夢の中でブルーストと會見するであらう。そして東洋と西洋の二人の詩人はその夢の中で、彼らの過去の美的一生を思ひ浮べしづかに語りあふ……………。

人生を幻といつたのは俳人芭蕉ひとりではあるまい。またそれは古今文人の個人的逃避の常套語だとばかりいへまい。人生大悟の彼岸になつとき誰がいつたい、さらつとかう思ひ流さなかつた人があつたらうか。永遠の「時」の流に押し流される人間一人の一生などは古人のいつたやうに、まさに流に浮ぶばかり水泡にすぎないではないか。

今夜私はブルーストが水盤に水中花を投げて彼の過去の思出をみるやうに、私もまた数片の白紙の上に一切の過去の美しい追憶を思ひ浮べた。

× ×  
さて私たちはあとに残る四高生諸君及び文藝部の諸君。私達が去つたあとにも諸君の力でもつと新しく、そしてはるかによくの北辰會雜誌を育んでいつてもらひたい。去るにのぞんで述べたいことは山々あるがどうも私の雑筆ではまほりかれる。ではなつかしい九冊の文藝雜誌を抱いて思出多い金澤の市とお別れしよう。

(山本生)

○  
なつかしいおもひでのお、いさん  
がつきだつた

美原

○  
此の欄への最後の筆を取るに當つていろいろの意味で思ひ起すことが多い。文藝部の中間入りをするやうになつてからの必して長いとはいへない歲月の間に、自分の爲して來たことは極めて少なかつたにも拘らず、自分の受けた薰陶は非常に大きかつた。恐らく數百枚にもなるであらう原稿紙

の反古も、創作といふことの困難を教へて呉れた尊い経験にはなつた。其の一行も書かれてない原稿紙を前にしての空しい數百時間の浪費も、徒らに焦燥と憂鬱とを味はふ爲ばかりではなかつたやうな氣がする。況して拙いながらも一篇の創作を書き上げた時の喜びは何物にも譬へることは出来ない。此の点で棄てられた多くの作品にも限りない尊敬を拂ふことを忘れなかつた筈だ。兎も角追はれ勝ちの日々の生活の中から、絶えず新しい努力を以て創作に精進してゆくことは、それ自身一つの尊い記録でもあるだらう。種々の方面に分配された文藝部の會合が、夫々の持つ意味に於て、文藝研究のよき刺激劑となつたことは誰しも疑はぬところであらうが、雜誌の投稿といふことも又それに劣らず吾々に勉強を強いるのである。それらが批評に於て創作に於て、吾々を益してゐる所は意外である。この空氣の中にあること自身が有意義なのである。發表し非難されることが吾々を鞭打つてくれる。個々の接觸が吾々の發展にとつて如何に大きなものであるか。今嘗て卓を挟んで語り、雜誌の上に名を列れた誰彼を思ひ浮べて感謝と親愛の情を禁じ得ない。併し今の所吾々は稍寂寥の感が深い。殊に小説やドラマに更に人を

得、内容を充實させる可きであらう。之は部の仕事をやるやうになつてからの一年間の自分の業績を顧みて、しかく大きく云へる限りではなく、又自らの責であるが、猶ほ一言したいのである。

末筆乍らいつも親しく我々を指導して下さい。部長先生にはつまらぬ贅言は却つて無駄と考へるので、たゞ有難うとだけ言つて筆を擱かう。

(水上)

○

三年生が卒業して行くなんで平凡なことだが、恰度人が此の世を去つて行くのが平凡なことと同じやうに、大きな悲しみを親しきもの、中にふり撒いて行く。

此の頃のコムバは實際愉快だったが、誰も知らない僕の心の奥底を分析して見ると、やはり悲しみの一沫があつたことを今にして知る。僕の歌の先生の作に

はかなこと思はぬに如かず此の上は我は歌はん悲しかれども(送別會)

といふのがあるが此んな氣持を持つには僕は餘りに期がすぎた。併し今にして始めて此の感がある。僕は今や斷言しやう。學校に入つて以來僕

は此のやうな親しい會合を持つた事がない。楽しい愉快な集ひであり得た——文藝部の集ひ。その中に三年生の人に對する親しみも培はれていつたのだ。僕は一体何を書いたら、今の淋しさが消えるだらう。吾は歌はん悲しかれども。遂に拙歌を贈る。

水上兄に

默しある君をおそれゐたりける語り出せば心安けし

安居兄に

酔ひしれてうどん屋に入りうどん食ひ共に語りし事を忘れず

菅谷兄に

はじめには偉き人ぞと思ひあぬ今は親しき友にしかるを

山本兄に

彦根なる城のほとりに育くまれともしき歌よむ君と親しむ

木村兄に

佛蘭西の繪を詩に書く君なればともしき手蹟貰はんと思ふ

小島兄に

たまきはる命ともしと詠みし君の命を吾は常思ふなり

本田兄に

歌會の歸りの夜道しみくと戀語せし君を忘れず

杉下兄に

いつものむつゝりした顔、コムバの時のニッコリした顔僕は忘れぬ

では皆さんさやうなら、石川屋の二階や壽亭などでの樂しかつた會合を忘れずにあて下さい

(佐藤)

○

別離——送別會の夜

ほのかにせゝらぎの面は暮れ

ほそき雨さへ降り出でて

宴の夜はゆるやかに更けゆく

今宵

別離の酒にさびしさを隠し

陶然として酔ひくれば

若き妓の蹴出しはほつれ

唄聲もしめやかにひやく

ウタダイクトキ

宴幾時か

日誌のことなど

唄聲はたとやめば  
酔ひ痴れしともがら皆  
手なとり合ひて  
若き生命の  
涙さん然として溢れ出にけり

(西村)

○

誰でも日誌に對してだけは正直である筈だ。だが、それにも拘らず、事實は偽りに満ちてゐるのだ。一体誰があのまゝを正しく表現する藝術的能力を持ち合せてゐるだらうか。有島武郎すら、「愛は惜みなく奪ふ」と云ふ告白の中に、正直に云はうとして云ひ得ない自分の無能力を歎いてゐるのだ。いや、それだけではない。たとひ、表現上の無能は許容するとしても、自分の日誌にすらも、大きな自己偽瞞を犯してゐはしないか。僕は正直でありたい。だが、これ程正直であることは難しいことなのだ。

「右に向つて何度。左に何度。だが、羅針盤が正しくない場合もあるにはある。然し、どんな場合にも、羅針盤自身から云つたら正しくないと云ふ

ことばなのだ」と、宗瑛は云つてゐるが、それは一時点についてのみ云ひ得ることであつて、現存と云ふ時点に立つ自己は、過去からの繼續を切り離しては考へられないのであるから、やはり自己偽瞞と云ふことはあり得るのだ。

又、主義に生きる、とは、強い生活原理を握むために必要であるかも知れないが、多くの場合、その主義に不満はあつても、更に強く或るものに不満であり、最も鋭く後者に對抗してゐるのが前者である時に、自分の眞意を偽りつゝも、人はその主義に引きづられて行くのではなからうか。たとひ主義に生きるにしろ、僕は自分をだけは偽らずにゐたい。少くとも、物を云ひ、物を書くときに、正直であり得る人があれば、その人こそ眞の藝術家であると云ふことが出来る。

(福井)

學年末的なおちつかない気分だ、三學期末は。そんなことが此の雜誌に影響しなければいいが。今學期は部外よりの原稿は極めて少かつた。そして其の少しの中から雜誌に載せ得るのを選ぶと御覽の通りの状態。僕はもつと部外からの投稿を欲する。

併しこゝに喜ぶべきことは三年生の人達から多くの原稿をいたゞき得たことだ。最後の雜誌を飾つて行かれる事を僕は喜ぶ。小島君、杉下君の短歌、水上君の論説を貰ふ積りでゐたのだが、都合で貰へなかつたことは残念だつた。末筆ながら絶えず力になつて下さつた伊藤先生に又篠原、大河の諸先生に感謝します。

(佐藤)

## 編輯後記

今度は僕達後に残るものが主になつて編輯する覺悟だつたが、幸編輯會議には三年生の人達も來て呉れてよかつた。



ことはないのだ」と、宗瑛は云つてゐるが、それは一時点についてのみ云ひ得ることであつて、現存と云ふ時点に立つ自己は、過去からの繼續を切り離しては考へられないのであるから、やはり自己偽囁と云ふことはあり得るのだ。

又、主義に生きることは、強い生活原理を掴むために必要であるかも知れないが、多くの場合、その主義に不満はあつても、更に強く或るものに不満であり、最も鋭く後者に對抗してゐるのが前者である時に、自分の眞意を偽りつゝも、人はその主義に引きづられて行くのではなからうか。たとひ主義に生きるにしろ、僕は自分を偽らさずにあたい。少くとも、物を云ひ、物を書くときに、正直であり得る人があれば、その人こそ眞の藝術家であると云ふことが出来る。

(福井)

### 編輯後記

今度は僕達後に残るものが主になつて編輯する覺悟だつたが、幸編輯會議には三年生の人達も來て呉れてよかつた。

學年末的なおちつかない気分だ、三學期末は。そんなことが此の雜誌に影響しなければいいが。今學期は部外よりの原稿は極めて少かつた。そして其の少しの中から雜誌に載せ得るのを選ぶと御覽の通りの状態。僕はもつと部外からの投稿を欲する。

併しこゝに喜ぶべきことは三年生の人達から多くの原稿をいただき得たことだ。最後の雜誌を飾つて行かれる事を僕は喜ぶ。小島君、杉下君の短歌、水上君の論説を貰ふ積りでゐたのだが、都合で貰へなかつたことは残念だつた。末筆ながら絶えず力になつて下さつた伊藤先生に又篠原、大河の諸先生に感謝します。

(佐藤)

### 【品賣非】

昭和七年二月二十六日印刷  
昭和七年三月二日發行

第百二十三號

石川縣金澤市東二丁目二十一番地

編輯兼發行者 水上 一久

石川縣金澤市西町九丁目番地

印刷者 高橋 覺吉

印刷所 明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會



